

2 生家と勉学ぶり

このように、今なお多くの人びとに親しみ敬われている天神さますがわらのみちさね菅原道真は、歴史学的にみてどんな人物であったのだろうか。

まず道真の生まれた菅原氏の家柄は、それほど高いといえない。菅原氏のもと土師氏である。土師の先祖は野見宿禰のみのすくねに発するといわれ、代々天皇のお墓守はかもりをしてきたが、奈良時代の終わりに至って、その住んでいる大和やまとの「菅原」という地名にちなみ、菅原姓に改めることを許された。

菅原氏は、大へん学問に熱心で、優れた人物が出ている。曾祖父そうそふにあたる古人ふるひとも、そのつぎの祖父清公きよこうという人も、つぎの父是善これぜんという人も、そして道真自身も、それぞれ一世いつせいに抽んでた学者であったことは記録に明らかである。

とくに道真の祖父にあたる清公は、今でいえば東大の総長とか文部大臣にあたる頭職しよくを歴任れきにんしている。父親の是善も、それに準ずるような仕事をした人である。そういう学者の家に生まれたことが、道真の一生に非常に大きな影響を与えていることはいうまでもない。

道真は、仁明天皇にんみんてうの承和十二年じやうわ（八四五）に生まれ、四歳か五歳のころ、すでに漢籍せきを読んだと伝えられている。ちなみに、浩宮ひろのみやさま（徳仁親王なるひとのう）も、幼稚園のころ宇野哲人博士のてつとから『論語』などの素読そどくを習われたと伝えられるが、そういう教育方法は昔からよくおこなわれていたのである。

やがて十一歳のとき、初めて漢詩を詠み、それからだんだんに勉学を積んで、もう十五歳前後には、立派な漢文の名文章をいくつも作っている。とくに中央の貴族たちが神社仏閣じんじやぶつかくなどに願がんをかけるさいに奉る願文がんもん、それを頼まれて代作だいさくしたものがいくつも残っている。

道真は、さらに今日の大学から大学院へと進む。すなわち、十八歳のとき大学寮だいがくしやうの文章生もんじやうしやうとなり、優秀な成績で卒業したあと、二十三歳で文章得業生もんじやうとくごうしやうという特待生とくたいせいに選ばれた。ちなみに、奈良・平安時代の大学は、都に一つしかなく、およそ二百人くらい学生を採ったが、そのなかで文章生になれる者は約二十人、さらに文章得業生もんじやうとくごうしやうに選ばれるものはわずか二人しかない。したがって道真は、百分の一くらいの狭き門せまをくぐりぬけて、優秀なエリートコースへ進んだわけである。

しかし、この文章得業生は、さらに方略試ほうりやくしという大へんむずかしい国家試験こっかしけんを受けなければならぬ。そこで、道真も非常な勉強をしたことが『菅家文章かんげぶんじやう』所収の詩文にみえる。

たとえば、二十五歳ころの詩のなかに、「光陰常こういんつね二足たラズ、朋交言笑ほうこうげんしやうヲ断たチ、妻さい子し親笑しんしやうヲ廃はいス」とある。光陰こういん（日月）はどんどん先へ行ってしまつて、いつも時間が足りない。だから「朋交言笑ほうこうげんしやうヲ断たチ」、友達とおしゃべりのような付き合いはやめよう、「妻子親笑しししんしやうヲ廃はいス」、すでに結婚していた道真は、妻や子供といっしょに親しく団らんの時間を送ることもやめてしまったという。当時はひたすら国家試験に合格するための勉強に全力を注いでいたのである。